

2018年度横浜ナザレン教会・三位一体後第七主日礼拝
「安息日の喜び」ルカによる福音書6:1～5

【聖書箇所】

ルカ 6:1 ある安息日に、イエスが麦畑を歩いて行かれると、弟子たちは麦の穂を摘み、手でもんで食べた。2 ファリサイ派のある人々が、「なぜ、安息日にしてはならないことを、あなたたちはするのか」と言った。3 イエスはお答えになった。「ダビデが自分も供の者たちも空腹だったときに何をしたか、読んだことがないのか。4 神の家に入り、ただ祭司のほかにはだれも食べてはならない供えのパンを取って食べ、供の者たちにも与えたではないか。」5 そして、彼らに言われた。「人の子は安息日の主である。」

1 安息日とは

今日のルカによる福音書は、安息日を巡ってのやり取りです。混同してしまいそうですが、安息日と休日は違います。休日とは、仕事をせずに、心身を休ませたり、遊んで気分転換をはかったりして、日頃の労働の疲れをとる日を言いますが、安息日は休日とは違った意味があります。今日のルカによる福音書に入る前に「安息日とはどんな日か？」についてお話ししたいと思います。

「安息日」の「安息」というヘブライ語には、「止める(やめる)」という意味があります。聖書の民の信仰では、一週間の七日目は、生産に従事する仕事や日常的な活動をやめ神を礼拝する安息日でありました。安息日は、創世記1章と2章に記されている天地創造に由来すると言われています。

創世記1章一地は混沌とし闇が深淵の面にあった永遠の昔、神は全世界を創造する業を始められました。六日間をかけて世界とそこに満ちる全てのものを創られた、特に人間は、他の被造物と異なり、神ご自身に似せて作られた、男と女に造られた…と聖書は語ります。

この創造物語は科学的な論文ではありません。ですが、荒唐無稽なファンタジーでもありません。聖書の創造物語には、この世界の本質が描かれているからです。それはどういう事かというと、「私達のすむ世界—この大宇宙とそこにある全ての命を創られた『神』がおられる。私達人間もまた神に造られた被造物である。世界の創造者である神は、ご自身が造った世界を深く愛し、喜ばれた。」という事です。「神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ、それは極めて良かった」(創世記 1:31)。神は六日の間、ご自身で力いっぱいこの全世界をお創りになられました、そして七日目は、ご自身のものである世界、「極めて良い」世界を愛で、喜びに満ちて安らいで過ごされたのです。

2 十戒

ご自身の民に、神の平安と喜びに与らせたいと思われた神は、十戒のうちの三番目の戒めとして安息日を定められました。出エジプトの20章、安息日の戒めは次の通りです。「安息日を心に留め、これを聖別せよ。六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も、家畜も、あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。六日の間に主は天と地と海とそこにあるすべてのものを造り、七日目に休まれたから、主は安息日を祝福して聖別されたのである。」(出エジプト 20:8-11)

人間はそれぞれの働きを通じて、生活に必要なものを得て生きています。また、それぞれに与えられた務めを果たしています。学校に通っているなら学び、病気の者は療養し、リハビリします。しかし、そうして自分の業に励めば励む程、私達は「自分がやっている」「自分の命は自分が養っている」という考えが強くなってしまわないでしょうか。そうして神を小さくしてしまう。そういう事が進めば、自分達人間の力で何でもできるとさえ錯覚する。人間を神のように考えてしまう。そうするとどうなるか、もっと豊かになりたい、もっと賢くなりたい、もっと健康になりたい、もっときれいになりたい…等、「もっと、もっと」ときりが無い欲求に支配され、追い立てられ、消耗し疲れ果てている…それが神を見失った人間の姿ではないでしょうか。TVをつけてみればいい。富や栄誉、健康、知性、人間の情愛などなど、自分の益となるような事を追い求めている姿が溢れています。人は、神なしでは、自分達の命を自分の欲望を満たす事に注ぎ込んでしまう存在のようです。

しかし、七日に一度、そんな自分が自分の主人である生活をやめる、そして神にささげる聖なる一日とする事で、イスラエルの人々は、自分が神に造られ、生かされている命だという事を思い起したのです。その為の安息日でありました。しかも、一人で休むものではありません。その家で一番偉い人だけ休むのでもない。全ての人、妻も息子も娘たちも奴隷も外国人も、共に休み、神の創造の御業を思い起したのです。みな神が「きわめて良い」と喜ばれる被造物です。そこに、自由人だ、奴隷だという身分の差はない、男女の違いもない、人種の差もない、いやそれどころか、動物だって神さまに造られたもの。そこになんの差別もありません。

自分は神のものだと自覚し、神に与えられ生かされている命を喜び感謝し、神を賛美して、神をより深く知る…それが安息日であります。この安息日が神の民—ユダヤの人々を支えました。彼らは安息日を通じて、神から命を受けていたのです。

3 神を喜び祝うこと

その確信を端的に述べたのが、本日の礼拝の招きの言葉、ネヘミヤ記8章10節「主を喜び祝う事こそ私達の力の源である」です。ネヘミヤ記がいつ書かれたか少し説明します。イスラエルの国がバビロニア帝国に滅ぼされ、人々は敵国の首都バビロンに捕虜として連れて行かれて、囚われの民として60年近くを過ごしました。やがて、バビロニア帝国は新興国ペルシアに滅ぼされて、やっとイスラエルの人々は故郷へと帰る事ができましたが、故郷エルサレムは戦いによって荒れ果てており、再建は遅延として進みません。捕囚からの解放から約100年たった時でさえ、まだエルサレムは廃墟同然だったのです。

ペルシアの高官となり王の近くに仕えていたユダヤ人ネヘミヤは同胞の窮状に心を痛み、ペルシア王に直訴して総督としてエルサレムへと派遣してもらいます。そこで彼は先に帰っていた人々と協力し、エルサレム城壁の再建に取り掛かるのです。様々な妨害や障害にあいながらも、エルサレム城壁は完成しました。その後の安息日には、エルサレムの全住民は神殿に集まり、神を礼拝します。モーセが書いたと言い伝えられる聖書の朗読と説き明かしが終わった時、人々は如何に自分達が父なる神の御心から離れて好き勝手にしていたかに気づき、罪を悔やみ涙を流して悲しみました。

しかし、ネヘミヤは全住民に宣言します。「今日は我らの主に捧げられた聖なる日だ。悲しんではならない。主を喜び祝う事こそあなた達の力の源である」。命の創り主である方、ご自身に背く民に国を滅ぼすという厳しい罰を与えつつも、決して見捨てず、敵地にあった時さえ世代を超えて守り導き、時が来れば故郷へと連れ戻してくださった一人の神。背きの民であるにも拘わらずご自分のものとしてくださった方。この神の深い慈しみを愛を喜ぼう！賛美しよう、神に造られた者として、背いたが罪赦され神の御許に連れ戻され神のものとされた、その喜びの故に神を礼拝しよう。そうする事によってのみ、私達は神から命の力を頂くのだ！イスラエルは神を礼拝する事によって命を得る…礼拝する民、イスラエルの確信が現れた言葉です。この言葉は、わたくしども、キリスト者の集まりー教会の確信でもあります。

4 本末転倒

このようにイスラエルの人々は安息日を自分達の命のように大切にしました。しかし、大切にするあまり「安息日に働いてはならない」という戒めを完璧に守ろうとしたのです。そうすると、「働く」とは具体的にどういう事なのか？どこからどこまでは働く事で、どこからどこまでは働く事にならないのか？が問題となってきます。

律法学者と呼ばれる人々が、この問題に取り組みました。聖書や祖先からの言い伝えを研究し、「安息日にはしてはならない事」を具体的に決めていったのです。それが安息日規定です。主イエスの時代には、安息日規定によって禁じられた行動が実に1500以上あったそうです。そしてファリサイ派の人々

は、律法学者が決めた安息日規定を、実際の生活で守る事に力を注いでいました。

何故そうまでしたのでしょうか？それは、安息日規定など掟を完全を守る事が彼らにとっては救いの条件となっていたのです。律法を完璧に守る正しい人だけが救われる…それが彼らの信仰でありました。安息日を守る事が救いの条件だと思い込み、そして、彼らは、本来の安息日の在り方を見失いました。「安息日には働いてはならない」という神の戒めから派生した安息日規定を守り、正しい者とされる事が目的になってしまったのです。その一方、安息日規定を守れない人々は罪びととして断罪し、交際をたちました。「男も女も、自由人も奴隷もない、自国民も外国人もない、人間と家畜の差さえもない、みな神に造られ喜ばれ生かされてある命だ」という安息日の神の喜びは忘れ去られました。もう、神に主導権を明け渡す安息日ではありません。自分達の力で掟を守る事が安息だと誤解してしまったのです。安息日の主は神ではなく、人間になってしまいました。

しかし、これはファリサイ派だけに限った事ではないでしょう。神に自分の一日を明け渡し委ねるよりも、自分達の伝統に基づいた掟を作り守る事を優先する。キリスト教会もそのような過ちを重ねてきました。私達はキリスト者と言えども、もともと自分は、主導権を神に明け渡す事を頑なに拒否する罪びとなのです。自分の神は自分でありたい…それが私達の自然な姿、キリストと出会う前の姿。安息日に礼拝する事を怠れば、神に造られた者、愛された者である自分を見失い、自分を神としてしまう…という事を忘れずにいたいと思います。

5 弟子たちの行動

さて、ファリサイ派の人々は、中風の男の癒し以降、主イエスと弟子たちにつきまとうようになっていたようです。ある安息日に、麦畑の間の道を主イエスと弟子たちが通って行っていた時も、主イエス一行を見張っていたようです。安息日の礼拝の後でしょうか、前でしょうか、それは分かりません。季節は小麦の収穫直前ですから、四月から五月、五旬祭一教会でいえばペンテコステの前あたりでしょう。弟子たちはお腹がすいていたようです。小麦畑にたわわに実っている穂をとって手で揉んで生のまま食べていました。勿論、弟子たちの畑ではありません。人の畑の麦の穂を摘むなんて！と思う方もいるかもしれませんが、意外にも律法では、お腹が減った貧しい人たちは、道に面している部分であれば、人の畑の麦穂を摘んで食べても構わなかったのです。収穫物は神からの贈り物。貧しい人や困っている人に分かちあう事が求められていました。

ファリサイ派の人々が律法違反だ！と問題にしているのは、安息日に麦穂を摘んで揉んで食べたからです。彼らの安息日規定によれば、麦穂を摘むの

が刈り入れにあたり、手で揉むのが脱穀にあたるからです。だから弟子たちは二つの安息日規定に違反した事になります。聖書には一言も書かれていませんが、さきほどお話ししたように律法学者達が色々と研究して、そのように決め安息日規定に加えたのです。それを根拠にファリサイ派の人々は主イエスに「なぜ、安息日にしてはならないことをするのか」と抗議しました。

6 ダビデ王の故事

主イエスは、律法に詳しいファリサイ派に対して聖書の物語を用いて反論します。「ダビデの話を読んだ事がないのか」。3節～4節です。主が仰っているのは、サムエル記上21章2節以下の物語です。今日はご一緒に見る余裕がありませんから、興味のある方は礼拝の後にでも読んでみてください。

この時、ダビデはまだ王ではありませんでした。ダビデの前に王様であったサウル王の時代です。ダビデがあまりにも優秀で人々に人気があったので、サウル王は妬み、暗殺しようとしてしました。サウル王の息子のヨナタンからそれを教えてもらったダビデは、サウルのもとから間一髪、着の身着のまま逃げ出します。しかし、食べ物がなくなり、ダビデもお供も飢えてしまったようです。逃亡の途中にあった神の家に立ち寄ります。そこで、祭司に対して、いかにもサウル王の命令で今から遠征に赴くかのようにふるまい欺いて、神への供え物のパンを貰って命をつないだ…というお話です。神への供え物のパンは、聖書にきちんと書いてある律法によれば、祭司以外が食べてはいけないものでした。ダビデはこれを食べて律法を破ったのです。その日は、言い伝えによれば安息日であったそうです。ですから、主イエスは、安息日に律法を犯して空腹を満たすダビデ王の故事を持ち出し、弟子たちが安息日規定を破ったというファリサイ派の批難に反論したのです。

7 安息日の主

そして主イエスは仰います。「**人の子は安息日の主である**」人の子とは、人々を救う為に神のもとからやって来る救い主の事です。イエス様はご自分を指して、「人の子」と言っています。人間であるダビデ王でさえ、時と場合によっては安息日の規則を超えて行動したし、神はそれを咎めてはおられない。そうであるなら、神のもとから来た救い主が人々のつくった安息日規定に囚われないのは当然ではないのか？と言っておられるのです。

ご自身を安息日の主と仰る、それは「安息日を支配するのはあなた方ではなく、この私だ」という意味です。イエス様は、細かな安息日規定を作り守る事によって安息日を支配しようとする人間の企みを「No!」「それは違う」とはっきりと拒絶されました。そして、本来の安息日の意味を示そうとされている、それが「人の子は安息日の主である」という言葉です。

“安息日の主”という言葉から、皆さんはどんな姿の主イエスを思い描くでしょうか。私は二週間前と先週、ご一緒に読んだばかりの徴税人レビの家で開かれた宴の席のイエス様を思い浮かべます。徴税人やその仲間たちは、安息日を守る事はできていなかったし、してもいなかったでしょう。会堂の礼拝から締め出されていたという事もあります。が、「もっと豊かになりたい」と欲望を追求する生活を続けて神を覚える事はなかったのだと思います。神を神とせず
にいた人々。しかし、主は仰います。「**私が来たのは、正しい人を招くためではなく、罪びとを招いて悔い改めさせるためである**」と。“悔い改めさせる”とは、神とは関係なく生きていた人々を、神の方へと方向転換させる事、神の所へ連れ戻すこと…と先週申し上げました。では、悔い改めた人はどうなるのでしょうか？神の方へと方向転換した人は具体的にどのような行動に出るのでしょうか。

礼拝する人となるのです。安息日に礼拝する人となる。自分を神としたそれまでの生き方をやめ、神を神とする、自分を神に造られた者と認め、創造者である父なる神を自分の支配者とし、礼拝するようになるのです。主イエスは、罪びとを安息日の喜びに導くために来られた…それが、「主イエスが安息日の主である」という言葉の内容です。そして、私は思うのですが、主イエスは、神の安息を見失っているファリサイ派の人々をも、悔い改めて真の安息日を守りなさい…と招いておられるのではないのでしょうか。

8 十字架によって買い取られた者

そして、私達人間がまことの安息日を過ごせるように、「罪びと達を神の者のする」という事を完成して下さいます。主イエスが十字架にかかって私ども全ての人間の罪を贖って下さったからです。私達人間は、どうしても自己中心にいきざるを得ない、自分を神とする罪の虜として生きてしまう者達です。しかし、神の御子イエス・キリストがご自身の命と引き換えに私どもを買い取って下さったのです。この主イエスの十字架の贖いによって、私達はもう自分のものではなく、神のものとされました。

私達は普段、自分の命は自分のものだと思って生きています。しかし、そうではない、神のものだ！と聖書は語っています。この事を私達は主の十字架を仰ぐ度に思い起こします。そして神のものとされ、父なる神の懷に抱かれて生きる事を深く喜び、礼拝します。十字架と復活のキリスト・イエスを通じて神を信じ礼拝する者には、天地万物を創った全知全能の神を「アッバ！お父さん！」と呼ぶ御子の霊が与えられる…それが使徒信条に出て来る「聖徒」であり、私達を生かす力の源となるのです。

本日、この礼拝に神によって集められたお一人お一人。それぞれの場所からここに集められました。おかれている日常はそれぞれに異なります。抱えている課題、苦しみ、悩みもそれぞれ。背負いきれないような苦しみにある方

もいるかもしれません。将来の不安に悩む方もいるかもしれません。家族のこと、自分のこと、仕事のこと、病や障碍…人生を生きぬく事は容易ではありません。

でも、私達は礼拝で御子の霊という新しい命を与えられます。色々に悩み苦しむ私達ではありますが、もう私達の命は私達のものではなく、父なる神のものです。私達は父なる神がその懐深い所に抱き歩いてくださる一人一人なのです。迷いの中、苦しみの中にあろうとも、この父なる神を礼拝し、このお方に親しく祈り願いながら、助けを叫びながら、神のものである命を生きて行く事ができます。必ず主イエスがそれぞれの苦境から救い出してくださり、栄光をあらわしてください。困難な中にある時こそ自分の力ではなく、神を礼拝し、神の力を信じていきたい、そして困っている仲間の為に祈る者でありたいと切に願います。